
つい考え込んでしまうキミのこと

菅原明智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つい考え込んでしまうキミのこと

【Nコード】

N3615Q

【作者名】

菅原明智

【あらすじ】

昔の通りにはいかない、マーモンのベルへの想い。気付けばボーツ、気付けば悶々。執着するものがお金から人に変わった時、マーモンは……

こんな感情は、はじめてだった。
だからどういう保存の仕方をしていけばいいのか、有効活用法とかが、まったく未知のものだった。

お金なら、もつと簡単だ。心を奪われる魅力的なものだけど、気持ちまでは持つていかれない。

でも一つ問題があるんだよね。好きなのは変わらないんだけど、今までは呪いを解く為に集めてきたお金は、今は正直使い道がわからない。

欲しいものも特には……ボクって実は物欲ないんだよね。

……呪いが解ける前は、ひたすらお金の事を考えていた。

解く為には、お金が必要なんだ。だからボクは集めるんだ。
って、ずっと思い込んでいたからね。

……でも今は、違う。

一人の人間の事が頭から離れなくて、お金の時よりもずっとずっと思考を支配される。

そばにいたくて離れたくなくて、そのくせ見つめられると顔を逸らしてしまつて。キミが顔を逸らせば、またボクはキミを見つめて……と、その繰り返し。

さすがに不思議がられたりもしたけど、はぐらかし続けている。

だって……どうすればいいかわかんないんだもん。

どうしたらいいの？　なんて言えればいいの？　どんな顔で、声で話せばいいの？　キミはいつも通りなのに、ボクだけがいつもと違う。声は上擦るし、顔は熱いし、キミに見られてると思うだけで指先が震えるんだ。

切羽詰まっていた時、たまたまそこにいたスクアーロに、気付いたら話していた。ああ、屈辱的。

「……ふうん、アルコバレーノでも恋するのかあ」

「はあ？　アルコバレーノ”でも”とは何さ。関係ないだろそんな事、呪いだって解けてるのに」

スクアーロの物言いが気に入らなくて、思わず唇が尖る。

そんなボクを見ても、スクアーロは訂正する処か笑うだけで、余計にイライラした。なんだい、なにがそんなに可笑しいんだよ。守銭奴なボクがこんなくだらない事を言ってるのが、そんなに可笑しいのかよ。

「……もういい。キミに話したのが間違いだったよ、ばーか」

「ベルには言わねえのかあ？」

せっかく悪態を吐いてそのまま去ろうとしたのに、ベルの名前に反応してつい足がびたりと止まってしまう。カス鯨の言う事なんか、

いちいち気にする必要ない。そんな風に思ってるのに、ボクは心のどこかでコイツに頼っているのか……？

「お前は器用だけだよ、んなに気になる事があるんなら仕事に手えつかなくなるんじゃないかあ？」

「……ふん。ボクに限って、そんな事ある訳ないだろう」

ボクは、ちゃんと仕事ができる。ちゃんと殺せる。確かに今心は不安定だけど、仕事に支障が出る程ではない。コイツに話したら余計にわかんなくなった。だからコイツの話を聞かないのが1番だ。

それでも、だからってこの気持ちをどうしたらいいのかなんて、答えが出るはずもなかった。

「スクアーロはやっぱりカス鯨だよ」

「今更なに言ってるの、そんなの当たり前っしょ」

ボクの独り言に思わぬ返事が返ってきて、慌てて振り向くと、悩みの元凶がそこに立っていた。

驚いたのと、嬉しいのと、恥ずかしいのがごちゃまぜになって、ボクの体温が上昇していく。

「べ、ベルっ……いつからそこに、」

「……なーにキョドってんだよ、らしくねー」

ベルの大きな手が、ぽんとフード越しにボクの頭に乗せられた。ぶわっ、と心に嵐が巻き起こった。その一挙一動で心にトルネードを起こすキミは、まさに怒涛の嵐。か……かつこいー！

「……まあもん？」

「な、なにっ……さ、」

いきなり名前を、しかもそんな可愛らしく呼ばれると、やっぱりドキッとしてしまう。それでもその手を払うなんて事ができる訳もなく、大人しくそのままの体制を保つ。

お互いフードと前髪で目元が隠れていても、相手がどこを見ているかくらいは分かる。ベルがボクをじっと見つめるから、いつも逸らす視線が逸らせなくなった。無言の時間が長ければ長い程、指先の震えが目立ってしまいそうで嫌になる。

「……もしかして王子のこと避けてる？」

フードの下の目を、思い切り見開いた。鼓膜を揺らしたベルの言葉を、言葉の意味を、必死になって考えた。自分の行動を思い返し、そつ取られても無理ないの……かな？に落ち着いた。

ボクが、ベルを避ける。

それは、決して嫌いだからではなくて、逆に好きだから起こしてしまいう行動。もちろん故意にやっている訳ではない。何度も何度も、普通に接しようとしては失敗に終わっていったただけだ。

「……もし、そうだとしたら……ベルはどう思うの？」

「キラわれてんのかなーって」

思う、と付け足すベルを、ボクは間抜けにもぽかんと口を開けて見上げてしまふ。ベルの手がボクの頭から離れ、愛しい体温と重みがなくなった。

それがなんだかとてもなく悲しい事に思えて、ボクは指先の震えも忘れて手を伸ばして、ベルの袖を掴んだ。びっくりしたようなベルの視線を、真正面から受け止める。……顔に火がついた。

「あ……や、これは、」

言い訳みたいなものをしながらも、手は離さない。恥ずかしくてパツと離してしまいたい衝動に駆られるけど、今離してしまえばボクの気持ちは蓄積され続け、いつか爆発して大変な事になると容易に予想できたし、離してしまったら逆にベルの言葉を肯定しているみたいだし、離す事だけはしなかった。

ベルの、何でも見透かしていそうな視線が、ボクを鋭く射抜く。どうせなら、もう見透かしてくれと思った。ボクがいま、キミに対してこんなにも特別な感情を持っているのだと、言わなくても伝わってくれるなら有り難い位だ。

「これって否定？」

「え……」

いきなりのベルの問い掛けに、顔を上げさせられる。これこれ、と顎で指し示す先は、ボクが掴んでいる袖。離せと言われてるのかと一瞬思って、指先が離れかける。……が、すんでのところで掴み直した。

さっきまで忘れていた指先の震えが、また再開される。ふるり、と情けなく震える自分の手を見下ろし、唾を飲んで喉を潤した。……潤せなかった、喉がカラカラに渴いている。

もお駄目だ、どーしよう。所詮ボクなんて凄いいスパーとか言われてても、呪いが解けてただの人になってしまったんだ。呪いが解ける前、姿が赤ん坊だった頃は、普通にベルの隣に居られたのに、今はこんなにぐちゃぐちゃになって……。ボクが今の名前にこだわっているのは、キミが呼んでくれるからなのに……。っ。

「……マーマン、オレに近付いて欲しくない？」

最後の確認をされているみたいで、そんな事ある訳ない、と心で訴えながら必死に頭を横に振った。ふるふる、とベルに伝わってくれるまで否定の首振り続ける。それによって髪の毛が頬に当たり、張り付く。未だに頭を振っているのに、髪の毛が離れていかない頬がむず痒い。

ずっと、一緒にいたいよ。

キミの隣に、ずっといたいよ。

キミから離れたくなんか、ないよ。

頬に、そつとベルの両手の平が触れたと思ったたら包まれて、首振りが強制的に止められる。親指が、ボクの目元をなぞった。そこではじめて、自分が泣いていたんだと気付く。

「……べ、る……？」

掠れた、情けない涙声が出る。ベルの手に顔を持ち上げられて、歪んだ視界にベルの顔を捉らえた。目をぱちぱちするとまた新しい涙がこぼれ、ベルがそれを拭う。

「……もついいよ、わかったから。頭痛くなっちゃうぞ、んなにぶんぶん振ってつと」

「う……うあ、」

確かに、止められてから少しくわんくわんする。でもベルの指に拭

われた頬は、ベルの指先の体温や感触を感じ取って火照り、ベルの冷たい手の平が冷やしてくれるのが気持ち良かった。

「べ、べる……ボクはっ、」

「キラわれてなくて良かった」

遮られて言葉に詰まったボクを見て、ベルが楽しそうに笑った。いつも通りに、王子様が綺麗に笑う。「ししっ、プニプニ」「む、ぎゃっ」頬を摘まれた。まるで昔やられたみたいに。

呪いが解けてからはじめてやられて驚く反面、懐かしさに胸が熱くなった。いつまでも変わらないキミが、無邪気に笑うキミが、愛しくなる。

「相変わらず色気ねーなあ」

「なっ、ちょ……キミ、」

「氣い張んなよ。いつも通りのお前でも十分可愛いんだから」

頬を摘まれてるだけでも間抜けな光景なのに、ボクの顔は呆氣に取られてもつと間抜けになっているかもしれない。だって……可愛いって、なにさ。

思考がぐるぐる回って訳が解らなくなる。でも、”キラわれてなくて良かった”って事は、嫌いなんかじゃないって伝わったって事なんだよね？……あれ？良かった、って？

「んな事よりさー、王子喉渴いた。ルッスんところこ」

「え、わつ、ベル!？」

ベルの大きな手が、今度はボクの右手を掴んで歩き出した。ボクの頭から、大量の”？”が放出されている気がする。ふと気が付くと、指先の震えが止まっていた。ベルの手によって止められたようにも見えるけど、それだけじゃなくて、ボクの肩の力が抜けたからなのかも。

「まま、待つて……ベル、速いよ」

体力不足ですぐに息が上がってしまうボクが速度を落とすように促すと、「う、わあっ!？」なんとベルに抱き上げられた。

「氣い張んなくてもいいけどさ、オレを意識したままでもいいんじゃないね?」

そう言われて、ようやく収まった緊張が舞い戻ってくる。でもそれに気付かなくなくて、そんなんじゃないもん、と強がってベルの首に腕を巻きつけてやった。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3615q/>

つい考え込んでしまうキミのこと

2011年1月28日04時40分発行